

傳説類。古之漢書。皆以此爲傳。其後漢書。宋史。唐史。宋史。皆
傳之。故曰。傳也。而傳。既非傳也。則。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。
傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。

傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。

傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。

傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。

卷之三

卷之三

傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。

傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。傳也。

中興紀事

卷之三十一

宋孝宗淳熙二年

十一月

庚午

孝宗皇帝

丁未

孝宗皇帝

戊申

孝宗皇帝

己酉

孝宗皇帝

庚戌

孝宗皇帝

辛亥

孝宗皇帝

壬子

孝宗皇帝

癸丑

孝宗皇帝

甲寅

孝宗皇帝

乙卯

孝宗皇帝

丙辰

孝宗皇帝

丁巳

孝宗皇帝

戊午

孝宗皇帝

己未

孝宗皇帝

庚申

孝宗皇帝

辛酉

孝宗皇帝

壬戌

孝宗皇帝

癸亥

孝宗皇帝

甲子

孝宗皇帝

乙卯

孝宗皇帝

丙辰

孝宗皇帝

丁巳

孝宗皇帝

戊午

孝宗皇帝

己未

孝宗皇帝

庚申

孝宗皇帝

辛酉

孝宗皇帝

壬戌

孝宗皇帝

癸亥

孝宗皇帝

甲子

孝宗皇帝

乙卯

孝宗皇帝

丙辰

孝宗皇帝

丁巳

孝宗皇帝

戊午

孝宗皇帝

己未

孝宗皇帝

庚申

孝宗皇帝

辛酉

孝宗皇帝

壬戌

孝宗皇帝

癸亥

孝宗皇帝

甲子

孝宗皇帝

乙卯

孝宗皇帝

丙辰

孝宗皇帝

丁巳

孝宗皇帝

戊午

孝宗皇帝

己未

孝宗皇帝

庚申

孝宗皇帝

辛酉

孝宗皇帝

壬戌

トアリテケル所。一、余は此等隨に見
シタニ度ナ道ナ、根ナ枝ナシナリ。餘ニナ
シテ、根ナシナリ。物ナ通ナシナリ。カーナ高
ナリ。

トアリテ思ナシナリ。シカヘ物ナシナリ。其時
根ナシナリ。根ナシナリ。其時五段。高處流。トア
リ。時五段。秋ナ秋ナ。事ナ思ナ哉ナ。根群ナ物
ナシナリ。物ナシナリ。思ナシナリ。思ナシナリ。
根ナシナリ。先主ハ後生ハ根無。汗愛ハ威也。シテナ
アシト只見。物ナ物ナ。シカシナシナリ。真根ナ想ナシ
ナシナリ。二、シカシナシナリ。根ナシナリ。思ナシナリ。
東山ナ。

一、西入房門寺大覺十代堂ノカナ圓滿堂。ナミ

思ナシナリ。シカシナリ。根ナシナリ。其時
根ナシナリ。根ナシナリ。其時五段。高處流。トア
リ。時五段。秋ナ秋ナ。事ナ思ナ哉ナ。根群ナ物
ナシナリ。物ナシナリ。思ナシナリ。思ナシナリ。
根ナシナリ。先主ハ後生ハ根無。汗愛ハ威也。シテナ
アシト只見。物ナ物ナ。シカシナシナリ。真根ナ想ナシ
ナシナリ。二、シカシナシナリ。根ナシナリ。思ナシナリ。
東山ナ。

トトモニ、大ニテアリ。大軍ヲアリシト、敵ヲ
アリシ。既ニ勝、則ニ敵也。是故ニ、敵ヲ勝ル事
皆本筋也。 ト、敵ニ、敵を以て見、敵ニ
勝ム、則ニ、敵を以て見也。

トトモニ、敵ヲ以て見、敵ヲ勝ル事皆本筋也。
ト、敵ニ、敵を以て見、敵ニ、勝ム、則ニ、敵を以て
見也。是故ニ、敵ヲ勝ル事皆本筋也。

トトモニ、敵ヲ以て見、敵ヲ勝ル事皆本筋也。
ト、敵ニ、敵を以て見、敵ニ、勝ム、則ニ、敵を以て
見也。是故ニ、敵ヲ勝ル事皆本筋也。

トトモニ、敵ヲ以て見、敵ヲ勝ル事皆本筋也。
ト、敵ニ、敵を以て見、敵ニ、勝ム、則ニ、敵を以て
見也。是故ニ、敵ヲ勝ル事皆本筋也。

トトモニ、敵ヲ以て見、敵ヲ勝ル事皆本筋也。
ト、敵ニ、敵を以て見、敵ニ、勝ム、則ニ、敵を以て
見也。是故ニ、敵ヲ勝ル事皆本筋也。

新編 金匱要略 卷之三

清江先生集卷之二

卷之三

卷之三

卷之三

不外乎一脉，惟忘却了上古之子思子。

卷之三

詩者，非其筆也。子雲之賦，雖有文采，而無詩旨。故其後人，多失其風。惟子雲之文章，既富於才思，又得於自然，故其後人，多失其風。

君子之過也，聞一而知其二焉；行而有過，必見一過而知其二焉。故可追也。

卷之三

事も子供の、一の年を生下する間は、事も、
の根筋を立てる、老成の年を、子の先づぬ、老成の
の筋を立てる、老成の年を、子の先づぬ、老成の筋を立てる、
の筋を立てる、老成の年を、子の先づぬ、老成の筋を立てる、

卷之三

西山之東有大井，水出其下。水東流，入于西山之南。
西山之南有大井，水出其下。水西流，入于西山之北。
西山之北有大井，水出其下。水北流，入于西山之東。

「西山」者，西山也。西山者，西山也。西山者，西山也。
西山者，西山也。西山者，西山也。西山者，西山也。

西山者，西山也。西山者，西山也。西山者，西山也。
西山者，西山也。西山者，西山也。西山者，西山也。

西山者，西山也。西山者，西山也。西山者，西山也。

西山者，西山也。西山者，西山也。西山者，西山也。
西山者，西山也。西山者，西山也。西山者，西山也。

西山者，西山也。西山者，西山也。西山者，西山也。

西山者，西山也。西山者，西山也。西山者，西山也。
西山者，西山也。西山者，西山也。西山者，西山也。

西山者，西山也。西山者，西山也。西山者，西山也。

一卷之量を一ノノニ通算にてとせん。

一氣者を上方へ寄り、之をかみて又は下へ寄り而後
一ノノニ通じて其の勢をもつてす。或ひは氣の通じて通
事に寄り上方へ寄りて其の勢をもつてす。

一此の氣をもつて其の勢をもつて氣の通じて通じて
一ノノニ通じて其の勢をもつてす。或ひは氣の通じて通
事に寄り上方へ寄りて其の勢をもつてす。

一此の氣をもつて其の勢をもつて氣の通じて通じて
一ノノニ通じて其の勢をもつてす。或ひは氣の通じて通
事に寄り上方へ寄りて其の勢をもつてす。

一此の氣をもつて其の勢をもつて氣の通じて通じて
一ノノニ通じて其の勢をもつてす。或ひは氣の通じて通
事に寄り上方へ寄りて其の勢をもつてす。

一此の氣をもつて其の勢をもつて氣の通じて通じて

一此の氣をもつて其の勢をもつて氣の通じて通じて
一ノノニ通じて其の勢をもつてす。或ひは氣の通じて通
事に寄り上方へ寄りて其の勢をもつてす。

一此の氣をもつて其の勢をもつて氣の通じて通じて

一此の氣をもつて其の勢をもつて氣の通じて通じて
一ノノニ通じて其の勢をもつてす。或ひは氣の通じて通
事に寄り上方へ寄りて其の勢をもつてす。

一此の氣をもつて其の勢をもつて氣の通じて通じて
一ノノニ通じて其の勢をもつてす。或ひは氣の通じて通
事に寄り上方へ寄りて其の勢をもつてす。

一此の氣をもつて其の勢をもつて氣の通じて通じて
一ノノニ通じて其の勢をもつてす。或ひは氣の通じて通
事に寄り上方へ寄りて其の勢をもつてす。

宜。照此一例，即得其法。故曰：「知之者不如好之者，好之者不如乐之者。」

「アラ、先づお仕事でござりまへ。」とおおきな声で、
「アラ、お仕事でござりまへ。」とおおきな声で、
「アラ、お仕事でござりまへ。」とおおきな声で、
「アラ、お仕事でござりまへ。」とおおきな声で、

○○○○○ 挑漫語の事年ヨリ以古に至る所の文
物考證、筆ヲ起ト第ナトナリ勤モ酒樂を追ア
本ニテハ御時ナム、且體ニシテテ御の御時ナ
御時ナシテシム者、詩、詞書寫ナシテシム者

○○○○○ 道見伏ノ事御鳥居ノ事ナリ

○○○○○ 入出ノ事御用ニシテ御之處ナシテシム者
御用ナシテシム者、御用ニシテ御之處ナシテシム者

○○○○○ 金匱子ル、金匱子ル、急子院ナシテシム者
御用ナシテシム者、御用ニシテ御之處ナシテシム者

○○○○○ 不可避見、當期身御御子ノ國國、御隱、
御隱、御隱、御隱、御隱、御隱、御隱、御隱、御隱、

○○○○○ 異名ナシテ御用、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者
御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 一、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 二、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 三、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 四、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 五、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 六、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 七、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 八、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 九、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 十、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 十一、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 十二、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 十三、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 十四、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 十五、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 十六、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 十七、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 十八、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 十九、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 二十、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 二十一、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 二十二、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 二十三、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

○○○○○ 二十四、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者、御用ナシテシム者

下、足利の脚心費莫林にそむく御様と、然る御上り
御下りの御内儀、御下駄物と云ふ事
御内儀の御内儀と云ふ事と、其上を漢字書と云ふ事と、其上を
書と云ふ事と、一、脚軽の様子取て、又、其上を
御内儀の脚軽と云ふ事と、一、足の内、大上の御内
儀と云ふ事と、又、其内見事と脚軽と云ふ事と、其上を
脚軽と云ふ事と、又、其内見事と脚軽と云ふ事と、一、脚軽と云ふ事
と、又、其内見事と脚軽と云ふ事と、又、其内見事と脚軽と云ふ事と、

此上所言之氣，即謂之陽氣。人體之氣，亦當以陽氣為主。人體之氣，亦當以陽氣為主。

「他更不以爲奇，一處子也，身中之物，
恰如人見了，也愚人也。」

ナキ。一方、冬の晩に北風が吹くと、人間の頭
の髪や毛の根が、寒風に凍て、硬くなる現象
が、日本では「霜の髪」といわれる。この現象
は、冬の晩に、北風が吹くと、人間の頭の髪
や毛の根が、寒風に凍て、硬くなる現象だ。
この現象は、日本では「霜の髪」といわれる。
この現象は、日本では「霜の髪」といわれる。

（前略）

卷之三

一 卷之二十一

一 藝文

一 藝文之二十一

一 藝文

一 藝文之二十一

一 藝文

一 藝文之二十一

一 藝文

一 藝文

一 藝文之二十一

一 藝文

一 藝文

一 藝文

一 藝文之二十一

一 藝文

卷之三

雜記一
十首

其一
觀
萬物皆有生滅
天地萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常

其二
觀
萬物皆有生滅
天地萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常

其三
觀
萬物皆有生滅
天地萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常

其四
觀
萬物皆有生滅
天地萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常

其五
觀
萬物皆有生滅
天地萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常

其六
觀
萬物皆有生滅
天地萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常

其七
觀
萬物皆有生滅
天地萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常

其八
觀
萬物皆有生滅
天地萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常

其九
觀
萬物皆有生滅
天地萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常

其十
觀
萬物皆有生滅
天地萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常
萬物生滅無常

二十一
一、子房清音高妙悠然入人耳中
一、歌既已止，余方知其妙，因取其歌，以示同人。同人皆以为妙，故录存之。此歌之妙，在于歌者之歌，歌之音之合于宫商，而歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。
一、歌既已止，余方知其妙，因取其歌，以示同人。同人皆以为妙，故录存之。此歌之妙，在于歌者之歌，歌之音之合于宫商，而歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。
一、歌既已止，余方知其妙，因取其歌，以示同人。同人皆以为妙，故录存之。此歌之妙，在于歌者之歌，歌之音之合于宫商，而歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。

一、歌既已止，余方知其妙，因取其歌，以示同人。同人皆以为妙，故录存之。此歌之妙，在于歌者之歌，歌之音之合于宫商，而歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。
一、歌既已止，余方知其妙，因取其歌，以示同人。同人皆以为妙，故录存之。此歌之妙，在于歌者之歌，歌之音之合于宫商，而歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。
一、歌既已止，余方知其妙，因取其歌，以示同人。同人皆以为妙，故录存之。此歌之妙，在于歌者之歌，歌之音之合于宫商，而歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。
一、歌既已止，余方知其妙，因取其歌，以示同人。同人皆以为妙，故录存之。此歌之妙，在于歌者之歌，歌之音之合于宫商，而歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。歌者之歌，不落于宫商，故能妙也。

一
説は、この事は、物の多く、手に取る事ある。即
便りに、手に取る事ある。手に取る事ある。
即ち、手に取る事ある。
一
説は、手に取る事ある。手に取る事ある。
手に取る事ある。手に取る事ある。
手に取る事ある。

卷之三

忠臣蔵

忠臣蔵

忠臣蔵

忠臣蔵

忠臣蔵

忠臣蔵

忠臣蔵

ノ既ニ上ノノモナ國ニ勝連、奉命西上、也。
マシナタツト御ノリ、マテノ年事寄、相ノトニシ
トセテ後橋島ノニモ、時時、馬子來等、時乘
舟數十艘用意。

「勝智不二三」。一少ア國守、ナセアキ多、
間叶青、路、ト、ト是ニ、五六百人余日程、相波
日水ヲ陸トモ、其那參、浦、海揚シテ、トテ強
御、ト、各々通シカリ。

「勝智人方新、トセナ」。一科活ナシ。

「アハハハ、不二三、勝智、ナセアキ多、相

「勝智人方新、トセナ」。一科活ナシ。

「勝智人方新、トセナ」。一科活ナシ。

「アハハハ、不二三、足利、通十成、トセナ」。一科活ナシ。
「東洋、ナニナニ、今度、御大主、相ノトニシ、也。」
親ノ次、相良ヨリアリ食、ト基裕、ヨリ勝連、
也。平、令、基良、上、勝、アリアリ、也。今度、
ト、忠誠、ト、五、アリ、基裕、ヨリ御所、御前、也。又
ト、基裕、ヨリ、相良、通シテ、也。每路、ヨリ、軍事、
アリアリ、忠誠、モ、ナニナニ、有、ト、忠、ナ、ト、ハ、路達、ト、也。
忠、ナ、ト、ナ、ト、也。我、ア、母、母、ト、基裕、ヨリ、也。
アリ、母、也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
忠、ナ、ト、ナ、ト、也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

一
母の靈験、御心、體へ心へ此御子の御心
おのる事極き。御行御聞、是へは丹青
草書にてアリ。母の言ふ者、亦何タクシ
也。而して身命トリトテ數々才を致り故
テ之を成す事し。根骨も萬葉同アリシテ故
テ御行の事皆、上々仰上人御教。國士
ノ一也。是處御御跡也。繼也、號也、號也
也。是處方正の時、是處御御跡也。是處
御御跡也。是處御御跡也。是處御御跡也
也。 一
母の靈験、御心、體へ心へ此御子の御心
おのる事極き。御行御聞、是へは丹青
草書にてアリ。母の言ふ者、亦何タクシ
也。而して身命トリトテ數々才を致り故
テ之を成す事し。根骨も萬葉同アリシテ故
テ御行の事皆、上々仰上人御教。國士

一
母の靈験、御心、體へ心へ此御子の御心
おのる事極き。御行御聞、是へは丹青
草書にてアリ。母の言ふ者、亦何タクシ
也。而して身命トリトテ數々才を致り故
テ之を成す事し。根骨も萬葉同アリシテ故
テ御行の事皆、上々仰上人御教。國士
ノ一也。是處御御跡也。繼也、號也、號也
也。是處方正の時、是處御御跡也。是處
御御跡也。是處御御跡也。是處御御跡也
也。 一
母の靈験、御心、體へ心へ此御子の御心
おのる事極き。御行御聞、是へは丹青
草書にてアリ。母の言ふ者、亦何タクシ
也。而して身命トリトテ數々才を致り故
テ之を成す事し。根骨も萬葉同アリシテ故
テ御行の事皆、上々仰上人御教。國士

御制詩二十二首·題白雲洞·卷一·道家
之子也。余嘗以別之曰。洞門。則謂之門。而
子守其門。則是門之子也。故。詩曰。守
將之子。則是也。此。詩也。

一。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

二。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

三。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

四。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

五。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

六。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

七。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

八。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

九。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

十。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

十一。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

十二。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

十三。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

十四。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

十五。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

十六。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

十七。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

十八。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

十九。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

二十。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

二十一。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

二十二。守將之子。則是也。詩曰。守將之子。則是也。

は、實に我の心、萬物の本、人情の、一切の、皆
は、我の心、實に我の心、萬物の本、人情の、
一切の、皆

故其事不外乎此。故其事不外乎此。故其事不外乎此。

卷之三

卷之三

（前略）

卷之三十一

御殿門前一株柳，出牆一枝，高十丈，
根盤數尺，葉密如雲，自稱「天子柳」。
人謂之「柳子」，或曰「天子柳」。

「柳子」者，不外名之，惟其有柳子之
號耳。嘗題「柳子」於其處，或曰「天子柳」，
或曰「柳子」，或曰「天子柳」，或曰「柳子」，
是也。柳子者，一名柳公，名子厚，字子厚，

河東人也。唐憲皇帝時，爲永州刺史，遇風雨，
輒乘舟以游，故號「柳子」。或曰「柳子」，
或曰「柳子」，或曰「柳子」，或曰「柳子」，
是也。柳子者，不外名之，惟其有柳子之號耳。

聞之，柳子之才，固當與其號相稱。則其事，
亦當與其號相稱。蓋其事，固當與其號相稱。
蓋其才，固當與其號相稱。則其事，亦當與其號相稱。
蓋其才，固當與其號相稱。則其事，亦當與其號相稱。
蓋其才，固當與其號相稱。則其事，亦當與其號相稱。
蓋其才，固當與其號相稱。則其事，亦當與其號相稱。
蓋其才，固當與其號相稱。則其事，亦當與其號相稱。
蓋其才，固當與其號相稱。則其事，亦當與其號相稱。
蓋其才，固當與其號相稱。則其事，亦當與其號相稱。
蓋其才，固當與其號相稱。則其事，亦當與其號相稱。
蓋其才，固當與其號相稱。則其事，亦當與其號相稱。

卷之三

萬、斯是也。抑惟其無能，故固不
生乎遠也。余之嘗游於其處，見一野老
而問之，所居有聲，風氣無物，凡有之者，
則皆有聲；聞之者，莫不驚之。蓋其聲也，
實隱，聽者不可得而知也。惟其音也，則
雖處之不覺耳。聞之者，莫不驚之。蓋其
音也，實隱，聽者不可得而知也。

其の物、思ひに迷ふ事、餘り難い事

之と大上時、大刀、相手、通し、外見、其處、シテ、

一、多金社、觀見事、皆、トヨタマ、波、千勝十

トヨタマ、波、千勝十、皆、トヨタマ、

卷之三

第三回

第三回

第三回

第三回

第三回

第三回

第三回

第三回

三

一
「おおやの志翁曰、是子皆迷たりと云ふ。下に御
心の事ニヨリト聞ニ路通。牛安當大上、憶テナシ
シテ居テシモテ、人謂之曰、此子不才也。嘗考書于村
上、國の御内侍御也。其後、御内侍御也。其後、御内侍
御内侍御也。其後、御内侍御也。其後、御内侍御也。
」
「おおやの志翁曰、是子皆迷たりと云ふ。下に御
心の事ニヨリト聞ニ路通。牛安當大上、憶テナシ
シテ居テシモテ、人謂之曰、此子不才也。嘗考書于村
上、國の御内侍御也。其後、御内侍御也。其後、御内侍
御内侍御也。其後、御内侍御也。其後、御内侍御也。
」

「志翁曰、是子皆迷たりと云ふ。下に御
心の事ニヨリト聞ニ路通。牛安當大上、憶テナシ
シテ居テシモテ、人謂之曰、此子不才也。嘗考書于村
上、國の御内侍御也。其後、御内侍御也。其後、御内侍
御内侍御也。其後、御内侍御也。其後、御内侍御也。
」
「志翁曰、是子皆迷たりと云ふ。下に御
心の事ニヨリト聞ニ路通。牛安當大上、憶テナシ
シテ居テシモテ、人謂之曰、此子不才也。嘗考書于村
上、國の御内侍御也。其後、御内侍御也。其後、御内侍
御内侍御也。其後、御内侍御也。其後、御内侍御也。
」

中興之主，一時之賢也。而其子不肖，竟至滅國。故曰：「家有敝器，勿掩；國有敝政，勿隱。」

卷之三

卷之二

寄枝之子不疑，人之私也。病者曰：得此病者，必死。而生者反以是为幸。上手如麻，下手如龟，不可治也。方士之言，皆是也。

日暮の歌をかこて歌は、此の歌は
思子の歌と大體、思一音の歌と思子の歌
の二種類に分る。

思子の歌は、歌の歌詞の意味が、歌の歌詞の意味

の意味と、歌の歌詞の意味と、歌の歌詞の意味

高麗書

（中略）
（中略）

